

音楽への回路を再構成する

Reforming the linkage to music

音楽を
“まなび
ほぐす”
Unlearning Music

対話型 音楽鑑賞を カイハツする

INTERVIEW

三ツ木紀英 Norie Mitsuki

アート・プランナー／認定 NPO 法人芸術資源開発機構代表理事

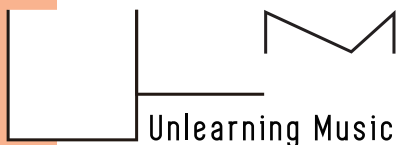
森文子 Fumiko Mori

ミューザ川崎シンフォニーホール職員

2016 年 11 月 12 日に行われたワークショップ「対話型音楽鑑賞をカイハツする」。ワークショップのお昼休みに、講師の三ツ木紀英さん（認定 NPO 法人芸術資源開発機構代表理事）、森文子さん（ミューザ川崎）にインタビューを行いました。

美術における「Visual Thinking Strategies」（VTS）を音楽に転用した「対話型音楽鑑賞」。今回のワークショップでは、対話型音楽鑑賞のデモンストレーションを通じて、ファシリテーターの立場から様々な音楽の聴き方を考え、「豊かさ」を可能にする新しいアプローチを模索しました。

そもそも「対話型鑑賞」とは何か、ファシリテーターに求められること、そして対話型音楽鑑賞を通じて何が得られるのか。インタビューでは、ファシリテーター自身の「学びほぐし」をキーワードに、芸術鑑賞、音楽鑑賞のこれからについて考えます。



Unlearning Music

音楽を“まなびほぐす”

教育普及プログラム実践者のための

人材育成事業

三ツ木紀英、森文子（語り手）×

向井大策（聞き手）

初心者の声に耳を傾けることで、ファシリテーター自身が学びほぐされる

向井 まず、午前中のセッションを終えられての感想をお願いします。受講生みなさんの反応はいかがでしたか。

三ツ木 「和音とか、もう少しディテールを聴かせたいのだけれど、どうすればいいでしょうか」という質問が出てきましたね。このように音楽的な要素を理解させたいという思い、やはり出てきたかと思いました。これは音楽だけではなく、美術の対話型鑑賞でもたまに聞かれます。私たちがプログラムの対象とする「鑑賞の初心者」はどんな人達なのでしょう。か？ 熟達者がプログラムを作るとき、初心者が消化しきれないほどの課題を出しがちだと思います。参加者がどのような人達であるのかを理解すること、参加者の目線に自分の目線を合わせることのむずかしさが表れた発言だと思います。

VTS がベースとしている美的発達段階¹の研究では、美術鑑賞の初心者は熟達者が知って欲しいと思う美的要素には関心がないことがわかっています。それは音楽鑑賞でも同じでしょう。そして、音を精妙に聴くことになれていないので、熟達者が聞き取れるような音の違いも掴めない。そのような初心者に作品のディテールを理解してもらおうと思っても、彼らがそれを自分のものとして消化するには、たくさんの時間やステップが必要でしょう。ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の研究が示しているように、鑑賞者の準備できていないことをいくら教えようとしても、なかなか身につかないのです。

一方、美的発達段階では初心者は作品イメージから物語を作ろうとする傾向があることがわかっています。私は音

楽鑑賞の初心者も、特に子どもの場合は、映像的にイメージを膨らませ、物語を展開する子が多いと感じます。そのように、熟達者が重要だと考える音楽的要素を無理に教えなくても、彼らなりに音楽を感じ、味わう方法を持っています。鑑賞の初心者が元々持っているこのチカラを使って、慣れない鑑賞に自信をもたせること、音楽鑑賞は楽しい!と思わせることがまずは大事だとおもいます。

この話は、また午後のセッションでもできるといいなと思っています。それが一番印象的でした。

向井 熟達者の場合、「分からないこと」が分からない、ということもあるのでしょうか。特に、音楽の場合、わたしたち専門家はそこに陥りやすいように思うのですが、どのように心構えを変えていけばいいのでしょうか。

森 やはりまずは、実際にファシリテーションを実践してもらうことではないでしょうか。言葉で「初心者を対象とした対話型鑑賞をやって、音楽のディテールをわかってもらおうとしても、実際にはむずかしいことが多いです……」と、説明しても、なかなか伝わりづらいのですが、何回か対話型鑑賞を実践すれば、「あ、そういうことか」と分かってもらえるはずです。

三ツ木 その通りだと思います。そして、ファシリテーションを実践してみると、一見つたなように思える対話の中から、子ども達がどんなに豊かに語っているのか、ということに気づくと思います。その気づきが、まさに「学びほぐし」だと思います。中にはその豊かさや本質を突いた発言に気づかないファシリテーターもいて、子ども達を信頼し、その声にどれだけ耳を傾けているかということが試されていると思います。そういう時はできるだけ、「あの子の〇〇という発言は、作品のこのような本質を捉えた発言だったよね」と指摘するようにしていますが。

向井 対象者が子どもではなく、大人の初心者の場合はどうですか。

三ツ木 大人同士でも同じです。例えば、午前中の対話型音楽鑑賞のデモンストレーションで、受講生のお一人が、音楽から壮大なドラマを語っていましたよね。熟達者が失ってしまった、物語を紡ぐ力やイメージする力を使って、とても豊かなイメージを心のなかで生み出していたと思います。そして、それは決して彼の勝手な妄想などではなく、音楽や演奏の中にあるものをうまく捉えていた。一番大事なのは、相手が子どもでも大人でも、参加者の一見途方もないように聞こえる物語やつたない言葉の中にある豊かさや、音楽から触発されて生まれてきているというつながりをファシリテーターがちゃんと聞き取っているか？ということだと思います。人は驚くほど表面的な言葉しか聞いていません。

この参加者の語る言葉の豊かさと音楽とのつながりに気づかないということが、もう一つのむずかしさだと思います。受講生

¹ 1970年代より認知心理学者の Abigail Housen は、鑑賞の初心者が美術作品をみる経験を通して、どのように美的思考を発達させるかを調査研究したところ、予想できる段階的な5つのパターンがあることを実証した。
<http://www.vtshome.org/research/aesthetic-development>

のみなさんは、彼のストーリーを聞いてどう感じたのでしょうか。
午後のセッションで、ちょっと聞いてみたいですね。

「対話型鑑賞」と「Visual Thinking Strategies」

向井 基本的な質問なのですが、対話型鑑賞は、もともと MoMA（ニューヨーク近代美術館）で開発された「Visual Thinking Strategies」(VTS) に基づくものですね。もちろん、方法論は同じで、ベースとなる考え方も同じだとは思いますが、なぜ「Visual Thinking Strategies」をそのまま日本語に訳さずに、「対話型鑑賞」としたのでしょうか。英語よりも、日本語の「対話型鑑賞」のほうが、僕はいい言葉だなと思ったりするのですが。

三ツ木 90年代に日本にVTSが最初に紹介された時、「対話型美術鑑賞」とか「対話型鑑賞」と訳され、広まったのだと思います。日本語にした時に、活動として行うことが明確にわかる訳語にしたのでしょうね。英語の「Visual Thinking Strategies」には、それを行う目的みたいなニュアンスが出ています。つまり、視覚的に、見て、考えるための戦略、ということになるのかなと思うのですが。



向井 森さんはミューザ川崎で、音楽での対話型鑑賞を実践されていますが、いかがですか。

森 確かにそうですね。わたしが初めて ARDA（認定 NPO 法人芸術資源開発機構）のファシリテーター講座を受けようと思った時も、たしかメールマガジンに「対話型鑑賞」と書かれてあったんですね。「Visual Thinking Strategies」ですって言われていたら、もしかしたら行かなかったかな。ある意味、「対話型鑑賞」と呼ばれているからこそ、じゃあ音楽でもやってみようとなったのかなとも思います。

三ツ木 「対話」と訳されたからこそ日本においては、美術だけでなく音楽にも、という流れが生まれたということはあると思います。

一方で、わたし自身は、「対話型鑑賞」と呼ばれていることのデメリットを感じることもあります。「対話」という言葉自体は好きなのですが、「対話型」と名付けると、ファシリテーターも「しゃべらせなくてはいけない」とプレッシャーを感じてしまう。言葉にしなくても、心の中でいろいろなことを感じたり、思考をしていればいい、というのが、もともとの VTS だと理解していますが、日本では名称が「対話型」であるだけに、「しゃべらせなくては」という力が働きすぎてしまうなと思います。

対話型音楽鑑賞の可能性

向井 対話型鑑賞は、色々な学習効果の考えられた、ひとつの芸術鑑賞のシステムだと思うのですが、それ以上に芸術を見るときか、芸術作品を見るときか、音楽作品を聴くとか行為そのものの、捉え方自体を大きく変えるものなのかなという気もしています。教養主義的にこう聴かなければいけないとか、こう見なければいけないということではなく、芸術をもっと自由に楽しんでいいのではないかということ、すぐ実践的な形でやっているということなのかなと。今後の対話型鑑賞はどのように発展していくと思いますか。

三ツ木 今は、対話型鑑賞の第二次ブームだと思います。鑑賞者たちの学習効果のほうに焦点が当たり、芸術を通じた対話によるコミュニケーション能力の発達などが今の時代にフィットして盛り上がってきているのだと思います。

しかし、対話型鑑賞を各地で広げる活動している中で気づいたのは、ファシリテーターのほうが、子どもから学ぶことが多いということなのですね。ファシリテーターとして学びほぐされるというというか、人として学びほぐされる。

子どもたちの既存のルールなどに捕らわれない自由なモノの見方、芸術に素直に向き合うところから生まれる豊かさや鋭さ、みたいなものを大人たちが耳を澄まして、言葉を聴くことによって学んでいる。子どもによって、自分たちの感覚がリセットされて、地に足がついていくという感じ。そのようにやる側の大人たちも学びほぐされ、変わっていくということが、活動が広がっていく原動力になっているなと感じています。芸術を通じた対話の中で、大人も開かれ、自分自身や周りの人、社会との関わり方がかわる。自分が生活する家庭や、職場の人達、地域の人達との関わり方に変化が生まれると言うことが、芸術の楽しい鑑賞の仕方が広まることよりも、実は大きな意味があるのだと思います。

向井 クラシック音楽という文脈ではいかがでしょうか。

森 今のクラシック・コンサートは、音楽の聴き方が決まりや作法でがんじがらめになってしまっているような感じがありますよね。例えば、「マナーをわかっていないとダメ」というよう

なイメージがすごく強くて、特にコアなファンの方ほど、閉鎖的な気がします。拍手の仕方ひとつとっても、分かっている素人がコンサートに行くことにクレームがあったりもするんですよね。音楽って本来そういうことではないはずなのに。

対話型音楽鑑賞のような実践を、子どもたちだけでなく、一般の大人の聴衆に対してもできたら、そういう堅苦しさに変化が生まれていくんじゃないかなと思います。「どう聴いていくか」ということを問い直したり、「こんなに自由に聴いてよい」というところから出発することによって、クラシック音楽界全体がほぐされていったらいいなと思います。

三ツ木 こうした実践が、クラシック音楽の新しい聴衆の開拓と新しい音楽文化を作り上げていくことにつながっていくといいですね。

(2016年11月12日 上野学園大学にて)



三ツ木紀英 | Norie Mitsuki

アート・プランナー／

認定 NPO 法人芸術資源開発機構代表理事

アート・エデュケーター、アート・プランナー。英国留学後、フリーや NPO の立場で美術施設だけでなく、街や保育園、児童館、学校、高齢者施設等で展覧会やワークショップを企画制作してきた。近年は対話型鑑賞ファシリテーターを育成することで、社会に埋もれているアートの種を掘り起こし中。共著『これからのアートマネジメント・ソーシャル・シェアへの道』(2011)、『現代アートの本当の見方―見ることが武器になる』(2014)、『現代アートの本当の楽しみ方-表現の可能性を見つけに行こう』(2015)。



森文子 | Fumiko Mori

ミューザ川崎シンフォニーホール職員

ミューザ川崎シンフォニーホールにてコンサートの企画制作を担当。教育プログラムでは対話型鑑賞を中心に、ファシリテーターとして活動している。



音楽を“まなびほぐす”

教育普及プログラム実践者のための
人材育成事業